窓際の彼

愚者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
窓際の彼

【Ｎコード】
Ｎ８７６７Ｅ

【作者名】
愚者

【あらすじ】
ｐｒｏｌｏｇｕｅ私は授業中にもかかわらず、黒板ではなく斜め右前の男子を見ていた。彼は橘篤短髪眼鏡で無口。容姿は上のほう。はっきり言えば、タイプだ。だから私は彼に告白し、今に至る。

#1

1st　出会い

丙（ひのえ）　涼（りょう）

その自分の名前を合格者の欄に見つけ、
当然と思いつつ私は友人とハイタッチをした。
クラスも同じ。
友人　佐伯（さえき）　静（しずか）
中学からの親友で容姿は上だが、学業は並ぶ。
お互い気の合ういい仲だ。

新しい制服の匂いをかぎながら教室に入ると、時間が早いせいもあり、
男子が一人窓側の席でぼんやりと外を眺めていた。
静は席が離れていた。
自分の席である、先ほどの男子の隣に座ると
「おはよう、橘だから。よろしく」
突然の挨拶
「おはよう、丙だ。よろしく」
内心慌てながらも返す。
挨拶は大事だから。
私は荷物を置くと静と小説の話で盛り上がった。
それから15分かからずにクラスの皆が教室にそろった。
このクラスの人数は30人＋担任一人らしい。

#2

２ｎｄ　彼はフリーズドライみたいだ。
私たちが入学し、一週間がたった。
その間に橘との会話は数回。
どうやら、彼はクールａｎｄドライな性格らしい。
ふと、
「フリーズドライみたいだな」
と呟くが、自分のこととは気づかず、彼はノートに集中していた。
彼は頭がいい、クラスの３位は確実だ。
それでも、彼はあまり嬉しそうな顔をしない。
休み時間はぼんやりと外を眺め、友人は数人いるようだが、
やはり橘と同じように外をぼんやりと眺めている。
一人を除いて。
横山（よこやま）　篤生（あつき）
同じクラスで橘の友人らしいが、
彼は良くしゃべるタイプだ。
テスト前は橘に範囲を聞き、
休み時間は世間話や冗談など。
一見、ただ騒いでるように見えたが、
空気が悪くならないところをみると、
いい奴なんだと思えた。
みな、彼は嫌がらず、笑いながら接していた。
どうやら、騒がしいのは程良ければいいらしい。聞いた話だが、横山はクラスの人気者らしく大抵の奴に話ができ、教師からの信頼も高い。
問題は成績だけらしく、彼がいるから平均点が下がってるとまで言われる始末。最近は橘のお陰で悪くはないらしい。他に橘の周りには橘並みに無口な斉藤（さいとう）　静夜（せいや）

横山程ではないが、はなす方の神酒（みき）　知夜（ともや）
メンバーのツッコミ役不破（ふわ）　和人（かずと）
皆、背が１７０を越す。
端から見るとストーンヘンジみたいだ。

#3

３ｒｄ　会話

最近、私は橘を見ていることが多い。何故だろうか。

静曰わく、

「あなた、恋じゃない？」若干、驚きながら言われた。

「女が他人を一日の大半使って考えてたら大抵恋よ」

「な、適当な事を」

「ふふ、気付くのが早いわね」

「バカにするな」

彼女の額を小突く。

「お、楽しそうじゃん？混ぜて？」

静の隣らしく、横山が絡む。

「ところで、どう？」

意味ありげに静

「バッチリ、４時に校門でＯＫ」

横山が空いたスペースに座りながら返す。

「・・・デート？」

小声で静に。

「そうよ。羨ましい？早く橘君と行きなさい」

静が耳元で囁く。

「そ、そんなんじゃない」つい、声が大きくなり、立ち上がってしまう。

クラスの数人の視線。

「静、こういう話昔から好きだな」

膨れながら座り直す。　「当たり前じゃない。人事だから楽しめるし」

如何にも楽しそうな顔をされた。

「俺も一♪」

横山も静と同じ顔をした
「お前ら、お似合いだな」膨れたままそっぽぽを無意識に向く。
「ところで、丙さんは好きな人は？」
横山が視界に入る。
「いるよね♪」
静がニコニコ。
「い、いたら？」
動揺が恥ずかしい。
「丙さん綺麗だから誰が好みかなって」
横山がチラッと真顔になったように見えた。
「短髪眼鏡で賢いのだよね？」
静が勝手に答える。
否定したいが、出来ない
「このクラスなら、橘に斉藤だな。はて、どちらだろうか」
横山がニヤニヤ。
「教えないからな」
持参の飲み物に口を付け、よそを向く。
「ふぅん。教えないんだ」目の前に橘がいた。
突然現れたので、咳き込む。
「面白いのは否定しないが、酷くないか？」
橘があたしの背中をさすりながら横山を睨む。
「すまんな、でも色々分かった」
まだ横山はニヤついていた。
「丙さん、すまない。横山にメールされてホイホイくる俺にも悪いところがあった」
そう言って、橘が軽く頭を下げる。
「気にするな。治まった」背中に残る橘の手の感触に緊張しながら答える。それに、横山に感づかれた事の方が問題だ。

#4

＃４　悪戯

「悪いけど、コレ頼んだ！明日ジュースおごるから！」
私に日直日誌を渡し、鞄を持って教室を出て行く。
「・・・私にも、予定はあるのを知ってるかな？静」
教室に日誌を持ったまま残された私は席に座りながら呟く。
「丙さんも大変だね。２リットルの注文すれば？ジュース」
突然後ろから声、振り返ろうとすると、
「振り返るのは自由だけど、着替えてるから」
即座に前を向く私。
「・・・更衣室を使うべきだろう？」
仕方なく、日誌を書く。
「運動系の部員さんで、一杯一杯。突然の雨は卑怯だね」
後ろで、衣擦れの音。本当に着替えてるようだ。
「だからって、普通女子のいる部屋で着替えるかな・・」
教室には私と橘だけ。他は帰ったようだ。
「丙さん、あまり気にしないと思ったから・・・・着替え終了」
「失礼な！」
振り向く私、
「ひゃ！」
視界一杯の狐の面。
「丙さん悲鳴可愛いね」
「君は悪戯が好きだね」
声が硬くなる、怒気が含まれるからだろう。
「好きな人相手だと、ね」
「ぇ？・・・」
「なんてね？」
彼は後ろを向いて鞄の中に手を入れる。

私は日誌を睨む、頬に熱を感じる。
「ここで、赤面してたりすると、可愛いよ？」
「下らない、さっさと帰ることを勧めるよ」
声が硬い。
「いいけど、３行目からぐちゃぐちゃだから書き直しなよ？」
彼は鞄を肩にかけて教室から出て行く。
「・・・・・・・まったく、人の気持ちも知らないで。着替えとか・・・ありえないだろ」
机に突っ伏す。
「あはは、乙女だにゃー」
背後から声。
「へ？」
「教室にいないだけで、廊下にはいたりして」
顔を上げると、橘が出てったのとは逆の扉に横山が立ってる。
「立ち聞きとは・・・悪趣味だな」
私の視線に殺気が上乗せされる。
「怖いにゃー、橘使用済みのタオルやるから簡便にゃー」
「いらないよ、私は婦女子ではない」
「乙女だニャー」
「遺書の書き方を知ってるかい？」
「教室での殺害の定番はナイフでサックリだにゃー」
「元のネタが分からないよ」
ため息をつき、日誌を書き直す。
「さてはて、横山さんは消えるにゃー」
「もういいや、帰ろう」
今日はもう、疲れた。

#5

＃5　静の悩み
「はぁ・・・・」
お昼休み、静の前の席を借りて二人で食べる昼食。
間に何度も聞かされるため息。
「静、今日ため息多くないか？」
「そう？・・・・まぁ、ちょっとね」
苦笑する静。
「解決は出来なくても、聞くことぐらいなら出来るが？」
「愚痴だし、恋話だけどいいの？」
「静が楽になるなら」
「あんた、昔からいい子ね」
寂しげに笑う静。
「ありがとう、で、話すのかな？」
「どうじに、せっかちね」
「じゃあ、五時間目の後にね」
私は席を立つ。
「冗談よ、とりあえず、昨日のお礼」
スカートから出てる太ももに冷たい缶ジュースが当たる。
「っ・・・冷たい！」
静の手からジュースを奪う。
「んで、話ってのが・・・」
「言うのかい・・・」
私は呆れながら席に座る。
「篤生なんだけどね」
「何かあったのかな？」
呼び方が下の名前なのは無視する。
「なんかねー、女性の相手が上手すぎるのよねぇ」

「・・・確かにそんな感じだな」
「なんかさー、今までの奴だといって欲しくない事うっかり言っちゃうんだけど、あいつ上手い事避けてるんだよねぇ
何ていうか、慣れてる？」
苺牛乳のパックのストローを吸いながら首をかしげる静。
「ふむ・・・経験豊富なのかもしれないな」
「いや、あいつはあまり経験無いよ、ただ、相手を大事にするだけだ」
突然、私と静かの間から声。
「ゲホゲホッ・・・・もう少し、自然に現れてくれないかな」
むせながら振り向くと、橘がいた。
「うん、だから自然に会話に・・・・」
「いや、今のは突然だと思うわよ？」
静も口元をハンカチでぬぐいながら言う。
「ふむ・・・難しいな」
会話に入るのが難しいとは、新しいな。
「話を戻すと、横山は経験が無い分、嫌われないように最善を尽くしてる。
つまり、相手に不快感を与えないように努力をしてるのさ」
橘が言い終えて、ポッケから５ｃｍ×８ｃｍほどの箱を出す・・・・・
まさか
「煙草？」
「吸うの？」
「違うッ！」
橘は少し考えた後、
「あー、これな。お一ついかが？」
「だから、吸わないって・・・」
彼が開けた箱からは甘い匂い。
「あんた、「ＨＩ－ＣＲＯＷＮ」」知らないの？」
静の声。

「・・・・・チョコか・・・・」
私はうな垂れる。
「因みに、ミルクだ」
箱から一つだし、包装紙を剥し口に入れる橘。
「サンキュ」
静も一つ貰う。
「因みに、涼の好みはビターよ？」
「言わなくていい」
「じゃ、いらないか。無念」
橘がポッケから手を出す。手の中には「ＨＩ－ＣＲＯＷＮ」のビター。
「用意がいいな」
はっきり言って、私はビターのチョコは大好物だ。
だから、この右手が箱に伸びるのは止めようが無い。
「まぁね、いろいろと努力中」
「・・・？」
「年齢と、年数が同じ数だと、そろそろ焦るのさ」
「あらあら、クールなイメージ台無しじゃん？」
よく分からない橘の台詞と、ニヤリと笑う静。
「いいんだよ、丁度好みだから」
「あらあら、頑張りな。おねぇさんからのプレゼントだ」
胸ポケットから映画のチケットを出す静。
「サンキュ」
受け取って自席に戻る橘。
「・・・・で、説明はあるのかい？」
私の発言に
「乙女は自分のことだけ考えなさいな」
頭をわしゃわしゃとかき乱される。
「む、ずるいな」
私が髪を戻すのとチャイムはきっと同時だった。

だから静に叩かれるまで橘を見てたんだと思う。

#6

＃６　誘われる。

そのお誘いは昼休みに突然来た。
私と静かと橘と横山という、いつものメンバーで昼食をとっていたときだ。
「ところで丙さん、今度の土曜一緒に出かけない？」
「土曜日か。構わないが、２人でか？」
「うん、僕と丙さんで。この間知り合いから映画のチケットもらったんだけど、横山とラブロマンス見てもね」
苦笑いする橘。
確かに、男２人がラブロマンスを見るというのは痛いな。
「分かった、だが、私とでいいのか？他の奴じゃなくて」
「構わないよ。じゃあ１２時に駅前の噴水で」
それだけ言うと橘は体操着の袋を持って出て行った。
「おっ？・・・いけね、次体育か。また後でだぜぃ」
そういって横山も静の頬にキスをして体育着を片手に出て行く。
「ん、学校ではそういうことするなーっ」
静は真っ赤になりながら横山を見送った。
「なんていうか・・・ご馳走様？」
「人のこと言えた義理かな？」
「私はそう言うのとは違うと思うぞ」
「どうだか」
「静は知っているのか？」
「おねぇさんは何でも知ってるのよ？」
「同い年の癖に」
静は、
「その辺は言っちゃ駄目でしょ」

とだけ言うと着替え始めた。
気がつけば教室に男子はおらず、女子が少しずつ着替えていた。
気がつけば教室に男子はおらず、女子が少しずつ着替えていた。
「それにしても、涼がデートか・・・らしくなって来たじゃない」
「何のことだ？」
「あんたとは中学から一緒だけど、そういう浮いた話なかったじゃない」
「確かに。でも橘がそういうつもりか分からないだろ？」
「ま、それもそうね～」
さて、土曜日は何を着ていこうか。
思いのほか楽しみな私だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8767e/

窓際の彼

2010年10月15日23時10分発行